



寺村山の神火祭り保存会
顧問 岸田 透さん

「住民みんなで 受け継ぎ、育てた祭り」

—190年近い歴史を誇る、寺村山の神火祭り。
時代に合わせてかたちを変えつつ、地域全体で守り伝える—

寺村地区に住む岸田透さん。教員を退職後、地域の社会教育活動に熱心に取り組んできました。昭和63年に「寺村山の神火祭り保存会」が発足した際には、初代会長に就任。岸田さんに、同祭りの歴史などについて尋ねました。

●寺村山の神火祭りの起源

寺村地区の山の神火祭りの行事は、文政6年(1823年)に始まったと考えられています。190年近くの歴史を持つ祭りです。寺村地区には六角山(標高325m)という山があり、山頂付近のほころには、山の神として大山祇神の娘である木花咲耶姫が祭られています。寺村地区の人々は毎年、旧暦の7月20日に108灯のオヒカリをともして山の神を迎え、山の幸と秋の豊作を願ってき

ました。この行事は、寺村地区のうち林慶・新田・堂村・中通りの4つの集落が、順番に準備と運営を行ってきました。現在は中通りが1〜3班に分かれ、6年で一巡しています。当番の代表は「宿」と呼ばれます。その年の行事が終わると、当番者全員が相談して翌年の宿を決め、火祭りに関する書類が入った箱を引き継ぎます。この決定を拒むことはできません。そうやって、ずっと祭りが引き継がれてきたのです。当番の書類の中には、宿やフレカタの名簿や祭りの会計などを書いた、文政6年から続く大変貴重な記録帳も残されています。

●行事の移り変わり

祭りの当日は、当番者全員で六角山に登り、ほころを掃除して供え物をし、ろうそくに火をつけて念仏を唱えます。その後、日暮れ近くなると、火を移して山の下にオヒカリをともしていくのです。昔は肥松（まこまつ）を使ってオヒカリをともしていたそうです。その数も108と決められていました。昭和32年から、肥松の変わりに灯油を使うようになり、

年々数も増加しました。最近では4千余りのオヒカリがともされ、山の斜面に「山ノ神」の大きな火文字や火模様を描かれて、幻想的な光景を見せています。このように祭りが盛大になってきたのは、昭和51年に、お盆に合わせて8月15日に祭りを行うように決めてから。これは、山の神火祭りの行事を町おこしのきっかけにしたいと考えたためです。今ではオヒカリのほかにも、

花火の打上、カラオケ大会、和太鼓などの演奏、夜市など、さまざまな催しが行われ、大勢の人出でにぎわっています。地域の伝統行事として、住民みんなが受け継いできた火祭り。これからも大切に引き継がれることを、心から願っています。



祭りを盛り上げる催しの数々 1 地元の和太鼓集団「喜鼓里」の練り歩き 2 夜市は、地域の若者が中心となって組織する「夜市の会」が開催。大判焼き、イカ焼きなどの屋台や、金魚すくいなどの出店を開く 3 小田高校に通う生徒たちもアルバイトで積極的にお手伝い

●特集 寺村山の神火祭り

お帰りなさい ふるさとへ

旧小田町寺村地区で毎年8月15日に行われる「寺村山の神火祭り」。この夜、山々に囲まれた同地区では、4千灯余りのオヒカリが闇の中に浮かび、大輪の花火が夜空を彩ります。祭り当日は、同地区が一年で最もにぎわう日。町内外から訪れる観光客はもとより、大勢の家族や親戚などが帰省します。ふるさとに帰る人たちと、迎える人たち。それぞれの思いが込められた祭りの夜が、今年もにぎやかに更けていきました。

